

当国の主要な輸出商品であるコーヒー産業の歴史と現状をまとめた。

#### 1. アラビカ種のコーヒー栽培の伝播:

コーヒー栽培は、8世紀にエチオピアで始まったとされる。伝説によれば、山羊飼いのカルデイが今まで見たこともない山羊の行動を見たことによる。山羊は、灌木の葉と赤い実を食べるやいなや、あちらこちらに走り回り、後ろ足で踊ったり、競い合ったり、楽しく遊んでいた。これを不思議に思い、山羊飼いがその光り輝く葉と実を試みに食べてみたら、しばらくして彼も山羊と同じく、はしゃぎ回っていた。

これがコーヒー発見の伝説と伝えられている(キリスト教説)。尚、イスラム教説によると、シェーク・オマールというイスラム教の僧侶がイエメンのモカで鳥が赤い実を食べながら陽気になっているのを見たことによる。

エチオピアでは、コーヒーに含まれているカフェインを更に効率よく摂取出来るよう、葉と豆を熱湯で茹でて更に柔らかい飲物を作り、飲料として商品化した。また、アラブでは修道士が夜の礼拝の間中、目覚めておられるようにコーヒーを飲んでいとされる。

アラブから17世紀にはイタリアにコーヒーが伝達され、18世紀には欧州でコーヒー文化が生まれた。その後、欧州の東南アジア植民地においてコーヒーの栽培が始まり、インドネシアのジャワからアムステルダムに送られそこで栽培された苗が1713年にフランスのルイ14世に贈られている。中南米には、1714年にスリナム上陸、1727年にはブラジルに広まり、エルサルバドルには1740年に上陸した。エルサルバドルのコーヒー栽培はアウワチャパンで始まり、その後サンタアナ、ソンソナテへ広まった。

#### 2. 19世紀のエルサルバドルコーヒー産業:

エルサルバドルでのコーヒー生産を過去に振り返ると次の4つに集約される。

##### ① 初期の収穫と輸出:

1830年から1865年において100千コロン(当時の通貨)の輸出有り。

##### ② 幼年期:

1865年から1872年において輸出が10倍となり1百万コロン。

##### ③ 青年期:

1872年から1879年、天然素材として使用される藍と熾烈な輸出競争となったが1879年にコーヒー輸出が49%、藍が32%とコーヒーが優位に立った。

#### ④ 成熟期:

1879年から1934年、輸出品目の殆どがコーヒーとなった。1904年には全輸出の81%、1940年には同90%がコーヒーであり、仕向国はドイツ、米国であった。コーヒーの黄金時代と呼ばれ19世紀の歴代大統領は、ほぼ全員がコーヒー農園主であった。国民の3/4がコーヒー生産に直接従事、残りの1/4の90%が間接的に従事していた。コーヒー産業はエルサルバドル人の得意満面になるという国民性を作り上げたとも言える。

19世紀終わり頃にブルボン種がグアテマラに伝わり、その後エルサルバドルでは60%がブルボン種、33%がサンタアナの農園でPacas家族が開発したパカス種となっている。

#### 3. コーヒー協定:

コーヒーは石油に次いで世界貿易の大きな部分を占めるまで成長したが、冷夏、ブラジルの干魃、戦争などにより経済サイクルが変動するという弱点がある。

1930年代の世界恐慌によりコーヒー相場が急落し、その結果、安定的に供給されるためにも1940年にワシントンでコーヒー米州協定が締結され、中南米から米国や他外国への年間輸出割当量が決定された。エルサルバドルは、米国向けでは27千トンで中南米ではブラジルの419千トン、コロンビアの142千トンに次ぐ第三位の地位を占めた。

1940年代から50年代前半にかけてコーヒー豆の価格は上昇し世界的に栽培が行われ特に安価なロブスタ種を中心とするアフリカのコーヒー産業が国際市場で影響力を持ち始めた。その結果、コーヒーの過剰生産により1950年代後半から相場は下落した。

米国、ブラジル、コロンビアなど生産国と消費国を含めたコーヒー協定締結の動きが出始め、中南米とアフリカの生産国で輸出割当て量を巡って対立があったが、中南米が量を増加、アフリカが減少することで合意がなされ、1962年9月30日にコーヒー国際協定が締結された。

国際コーヒー機関が10月1日をコーヒーの日と定め、エルサルバドルでも毎年10月1日をコーヒーの日と呼んでいる。

1960年代になると工業化の波、市場志向経済も発展し、中米共同市場構想もありコーヒーモノカルチャーが減少し始めた。ただ、エルサルバドルは、コーヒー、砂糖、綿花、海老、少量ながら米、牛肉の農産品輸出に頼っていた。

#### 4. 不安定な内政とコーヒー産業への影響:

1970年4月、ファラブンドマルティ(FPL)が発足し、1971年2月11日、コーヒー栽培で貢献していたErnesto Regalado Duenas氏(36歳)が誘拐され9日後に死体となって発見された。これが初めてのコーヒー従事者の被害事件となった。

その後、コーヒー経営者、会社経営者、外国大使の誘拐も続発し多くのコーヒー従事者も誘拐、殺害されていった。産業界も同様で、日本企業やパソコンに使用されるチップ生産をしていた米国の Texas Instruments 社も撤退した。

ただ、コーヒーの木はこのような中でも成長を続け栽培も継続し、1975 年には世界 3 位の生産国となり、1978/79 収穫年度では 201 千トンが生産され史上最高記録となった。

1980 年 10 月 10 日、FMLN 党が結成され、これにより 1980 年以降コーヒー産業の発展にブレーキがかかった。生産量は、1988/89 収穫年度には 89 千トンにまで減少。その背景としては、以下が上げられる。

- ① 12 年間続いた内戦。内戦中にコーヒーミルが破壊された。
- ② 1981 年 3 月のコーヒー輸出ビジネスの国有化、これにより 100 年以上続いた伝統的なブランドを喪失。
- ③ 農業改革と法令の不安定さ、不確実さ。
- ④ 為替、税制政策によるコーヒー部門への悪影響。

内戦は、地方かつコーヒー生産地の山岳地帯で繰り広げられた。また、国有化によりコーヒー輸出用為替レートが 5 コロン/ドルから 2.5 コロン/ドルになり輸出額は半減した。コロンでの損益は 4, 615 百万ドルの損失となった。

更に、1986 年には輸出税が 30% から 45% に引き上げられ、1989 年にはエルサルバドルではグアテマラの約 5 倍、コスタリカの約 7 倍の税金が課されており、価格競争力の低下とコーヒー農家の収益を圧迫することになった。

生産性の高いコーヒー農園は、農業改革により国に収用され集団農園に取って代えられた。この結果、個人所有農園はなくなり集産主義経済となった。

その後、1989 年、ARENA 党が初めて政権を握り、コーヒービジネスの自由化と輸出税の廃止がなされた。

#### 5. コーヒービジネスの現状:

エルサルバドルのコーヒー生産地は、西部 52%、中央部 29%、東部 19%となっているが、生産量増加と東部地区経済開発を目指し政府としては東部での生産に力を入れている。現在のコーヒー農業従事者は約 50 千人。

2012 年にサビ病が発生、その結果生産は 20 千トンまで減少したが、2016/17 収穫年度には 35 千トンまで回復、2017/18 年度には 50 千トンまで増加する見込みとなっている。また、今後 8 年間において生産量を 200 千トンまで増加させる計画がある。栽培面積は 29 千 ha 増加して 165 千 ha

と微増ながら生産性の向上、気候変動管理向上など技術刷新を図り目標を達成する計画である。このうち、プレミアムコーヒー生産量は 65%のシェアを維持する計画である。

(2014 年に農牧省傘下に Centa Cafe が設置され生産者への技術支援を行い、2016 年から小規模生産者に対して農薬、サビ病耐性品種のコーヒーの木を提供するプログラムが開始された)。

エルサルバドルのコーヒー種は、アラビカ種ブルボン亜種が主力で生産の 50%、エルサルバドル原産のパカス種 32%、希少のパカマラ種 3%もあり香り、甘さ、バランスが取れた酸味が特徴となっている。尚、生産の 71%は標高 900-1, 500m の間の山間部である。

輸出先としては、量的には米国向けが1位で 41%(主にブレンド用)、2 位に日本 14%(主にプレミアム用)、3 位はドイツ 9%(アジア向け合計で 22%)。日本向けはこの 3 年間で年間 4 千トン、15 百万ドルで、大手商社含め日本企業約 20 社がコーヒー対日輸入を行っている。

日本ではエルサルバドルコーヒーはブレンド用として販売されていたが、近年では 1880 年から続くモンテカルロス農園(アワチャパン県アパネカ地区、標高 1, 750m)を中心としてブルボン種、パカマラ種(マラゴジッペ種とパカス種の交配種)というプレミアムコーヒーの生産、販売がなされている。日本向け輸出のプレミアムコーヒーの割合は 2015/16 年度で 82%と前年比 14 ポイント上昇。

中米では土地の狭さから大規模生産が出来ないため、今後共差別化できるプレミアムコーヒーを目指して生産が進んでいる。因みに、1982 年に SCAA という米国スペシャルティコーヒー協会が発足し、コーヒー生産国毎に品質に優れたコーヒーを評価し始め、1999 年には Cup of Excellence と呼ばれるコーヒーの品評会とネットオークションをしている ACE(Alliance for Coffee Excellence)という団体がネットオークションを開始している。

エルサルバドル北西部のチャラテナンゴ地域は、コーヒーの生産地としては知られていなかったが、近年 Cup of Excellence にてパカマラ種で上位を独占するようになり、栽培面積は小さいが高品質のコーヒー生産地として国際的に知名度を上げてきており、同地の生産者の生活改善に大きく貢献している。

エルサルバドルは、量より質を重視した栽培方法に転換し、国際相場に左右されないプレミアムコーヒーの生産を増加させる方策を取っている。

(2015/16 年度の国際相場は平均 135ドルに対しプレミアムは 309ドルで取引されている)。

以上